



プロフィールサイトにおける個人情報暴露に関する 考察

著者	小出 篤史, 星野 豊
内容記述	日本セキュリティ・マネジメント学会第26回全国大会、2012 年6月電気通信大学
発行年	2012-06
その他のタイトル	Brief comments of disclosure of private or personal information in profile sites
URL	http://hdl.handle.net/2241/120130

プロフィールサイトにおける個人情報暴露に関する考察

Brief comments of disclosure of private or personal information in profile sites

小出篤史[†] 星野豊[†]
Atsushi KOIDE[†] Yutaka HOSHINO[†]

[†] 筑波大学 人文社会科学部

[†] Graduate School of Humanities & Social Sciences, TSUKUBA UNIVERSITY

要旨

プロフィールサイトなどさまざまな形態の情報発信を背景に、学校教育においては徹底した情報モラル教育がなされているようにみえる。しかしながら、依然として未成年者、とりわけ青少年世代の個人情報の暴露が多いといわれており、さまざまな事件・事故が後を絶たない。

本稿では既存研究の内容を踏まえ、新しい形態の予期しない情報の暴露リスクがあることが判明した。現状調査の結果と対策について報告する。

キーワード

個人情報、暴露、プロフ、ツイッター、生放送、学校教育

1. 背景

未成年者における携帯電話を含めた情報リテラシーは、世代を追うごとに大きく向上している。つい最近に到るまでは、プロフィール、リアルタイム、ブログがその中心であったが、近年では、ツイッター、生放送など、さらに多様化、高度化の傾向を見せている。

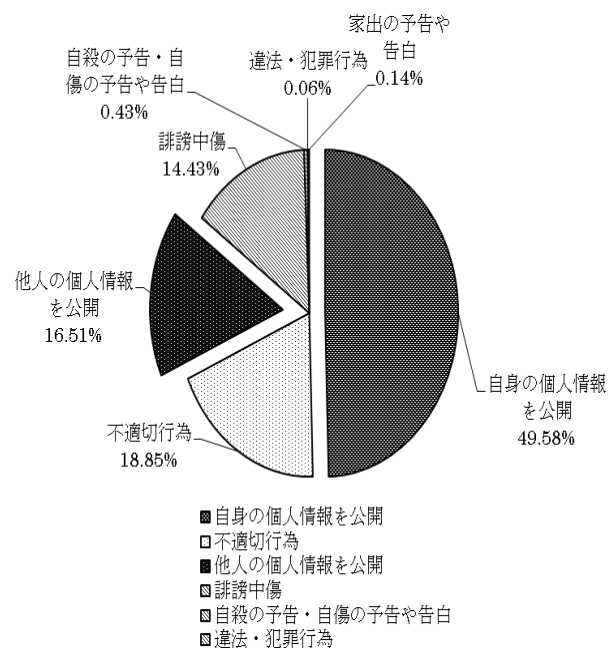
高等学校における教科情報や大学学部における情報リテラシー教育においても、情報モラル教育の重要性は、従来からのパソコン操作実習と等しい割合あるいはそれ以上に、今後高まっていくことが予想される。

表1は、平成22年度における都内の公立小中高等学校等を対象とした非公式サイトの監視調査報告である。これによると、不適切行為として挙げられているのは、自身の個人情報を公開、誹謗中傷、他人の個人情報を公開、家出の予告や告白、などがある。その内訳は「自身の個人情報を公開」、「他人の個人情報を公開」など個人情報の暴露で70%近くを占めている。

また、別の調査では、高校生のうち約半数に相当する47.3%が自分や他人に関する個人情報を書き込んだことがあると回答している。[3]

さらに、非公式サイトの監視結果と併せて個人情報の暴露問題については、今日最も大きいものとなっている。このような不適切書き込みの量的側面に注目すると、個人情報の暴露への対策について、改めて検討することが必要になると考えられる。

表1 不適切行為の分類[2]



2. 既存研究と研究動機

既存研究[1]では、大手プロフィールサイトの実データから、年齢層や性別など利用者属性の調査、HN（ハンドルネーム）の本名由来の有無、メールアドレスの公開有無などの個人情報暴露調査を行っており、ここでは、調査対象を未成年者一般として無作為に抽出し、学校種別、性別をはじめとする属性に分類している。

しかしながら、プロフィールサイトの情報を無作為な「出会い」目的で利用した場合、地域や性別のほか、学校名で検索することも、少なからず生ずるものと思われる。[1]でも、学校の公式サイトとの情報の突合による事例が掲げられており、プロフィールサイトの情報は、実質的には学校名で関連付けて利用されることが多いと考えることができる。かかる考え方を前提とすると、調査対象・件数を学校名に限定し、より踏み込んで調査することにより学校内での個人情報暴露の傾向を把握することができるのではないと思われる。他方、近年急速に規模を拡大している情報発信の方法として、ツイッターや生放送があり、近時、個人情報暴露を背景とするトラブルが発生するようになってきているが、この点については、プロフィールサイトの個人情報暴露の問題とどのような関係があるのかという問題がある。

そこで、以下、**3.**では、調査対象の学校名をキーワードにデータを抽出し、個人情報暴露の実態の調査を行う。そして、**4.**では、新たな個人情報暴露のリスクとして、ツイッターや生放送の2つのサービスに注目し、両者における個人情報暴露上の特徴と問題点を明らかにする。そのうえで、**5.**では、プロフィールサイトとツイッターや生放送との相互関係に注目し、収集しうる情報から、どのような個人情報暴露が考えられるかについて検討を行う。

3. データの取得と分析

調査対象として、関東地区に所在する高等学校のうち中規模校を選定した。(表2)

表2 調査対象校の概要

項目	内容
所在地	関東地区
学校種	高等学校
生徒数	約720人

調査対象学校の略称においてはA～Fの6通り考えられるため、それらをもとにキーワード抽出を行った。(表3)

表3 検索結果

キーワード	件数
略称A	297件
略称B	112件
略称C	8件
略称D	24件
略称E	3件
略称F	12件
合計	456件

合計の件数は456件であるが、プロフィール項目に複数の略称を掲載している場合など、プロフィールサイトのIDをキー項目にして重複を排除した結果336件になった。(表4)

表4 重複調査結果

項目	件数
ID件数	456件
純件数	336件

純件数とした336件を対象に調査を行うことにする。ただし、当該結果には卒業生や中退者などが含まれている可能性がある。

表5 調査結果

項目	件数
HNに本名を利用	1件
他人の本名を掲載	78件
自己の誕生日を掲載	156件

調査結果は表5の通りである。HN（ハンドルネーム）に自身の本名を掲載している例は1件に過ぎず、「個人情報掲載しない」という、教育現場における情報モラル教育が、一応浸透していると思われる。

しかしながら、プロフィール項目に他人の本名を掲載している事例が78件と多く、「好きな男性のタイプ」、「好きな女性のタイプ」などの項目で、暴露が発生する傾向がある。

好きな男性のタイプ

●●/2011.10.10

▲▼\半年突破中

あきお依存症
あいしてっから

秋〰〰春 2012.06.10..
男〰〰美 next→8ヶ月

図1 他人の本名暴露例（女性）

好きな女性のタイプ

甲野春美
SINCE 2012/05/02

絶対終わらせないよ??
最後の恋だからさ。

春美に何かしたら
俺が許さねーから。

図2 他人の本名暴露例（男性）

前頁の図1・図2からもわかるように、特に交際相手がいる場合に、交際相手の氏名と交際開始日と月毎の応当日を、記念日として記載することは、比較的多く見られる。

他人の個人情報の掲載は男性に多いと思われる。図1のように女性側では本名を記載することがあってもひらがな表記であるか、名前部分だけであることが多い。しかしながら、図2のように男性側においては、本名をフルネームで記載する場合が多いようである。

また、図3は自己の誕生日を掲載している例であるが、このような例は、156件あった。誕生日や交際開始日は、当事者にとって記憶が容易であることから、ログインパスワードに設定されることが多いものと思われるが、プロフィールでの公開項目から推測可能なパスワード設定の危険性は、いうまでもないことである。

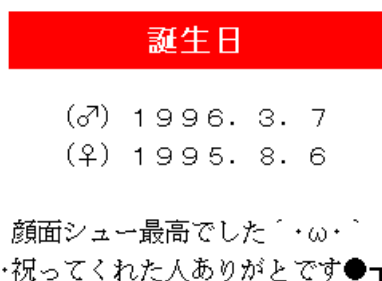


図3 誕生日の公開例

4. 新サービスの特徴と問題点

近年急速に規模を拡大している情報発信の方法の典型として、ツイッターや生放送がある。前者は、ツイートと呼ばれる140文字以内のメッセージの投稿を通じて、情報交換や交流を深めるものである。[1]後者は、放送主により音声映像を一方的に視聴者へ配信するだけでなく、視聴者からのコメントを放送主・視聴者間相互に放送中リアルタイムに交換することにより交流を深めることができるものである。[5]

一方で、これらの情報発信方法については、放送主等に対するストーキング行為が問題化しつつある。具体的には、恋愛や性行為の対象を見つける目的の「出会い厨」や、放送主に対する恋愛感情を背景に困り込みを目的とする「困い」と呼ばれる人がおり、[5] 交際相手候補との感情のもつれから、ストーキング行為に至る場合が生じてくるわけである。このストーキングの際にストーカーによって利用されるのが、対象者の個人情報であるが、次の5.で示すとおり、ツイッターとプロフィールサイトの情報を突合した形態で、新たな個人情報暴露リスクがあることが判明した。

5. 予期しない情報の暴露リスク

図4は、プロフィールサイトで得た個人情報に加え、ツイッターを利用することで新たな個人情報が暴露される、あるいは暴露できる引き金を得ることができる過程を示したものである。

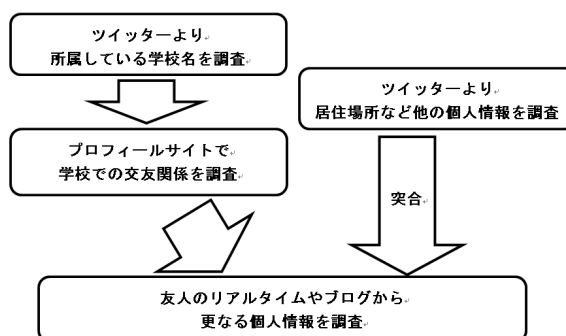


図4 ツイッターと組み合わせた新たな暴露リスク

次に、具体例として図5・図6を挙げる。

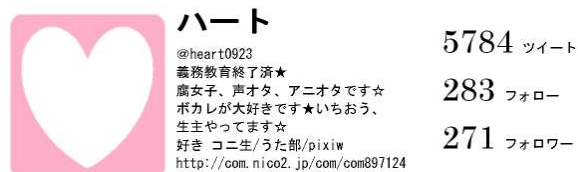


図5 ツイッターの自己紹介例

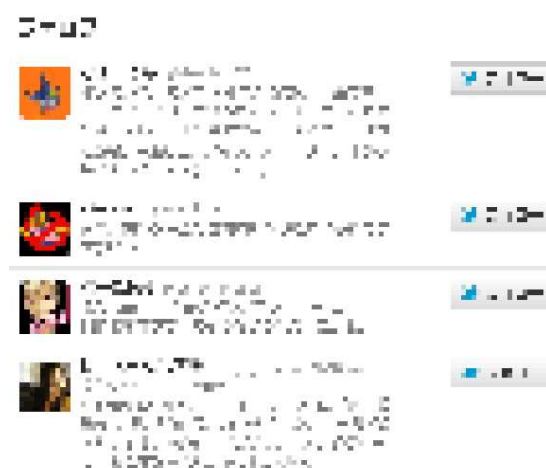


図6 フォロワー一覧の例

プロフィールサイトには、2. 及び3. で前述したとおり、学校名をキー項目にして検索することができるが、ツイッター、あるいは生放送サイトでは、発信者自身の学校名を公開されているケースは限定されている。これは、個人

情報暴露に対する事前対処の一環としての意識が高いことによるものと思われる。実際、図5はツイッターの自己紹介例であるが、確かに学校名は記載されていない。しかしながら、図6を見ると、お気に入り登録されている人間関係について、フォロワーとして登録されている。こうしたことから、一定の人間関係があるものにはフォロワー一覧には掲載されるはずであり、フォロワーのツイートと、自身のツイートの内容を組み合わせることで、学校名の特定、所属組織の到達が可能になることもあり得ない話ではない。



図7 所属組織到達の例

図7は、所属学校が同じと思われるフォロワーの記述(上部)と、本人による記述である(下部)。両者の投稿は、それぞれは個人情報ではなく、単なるつぶやきで完結している。

しかしながら、以上の情報を突合すると、千葉駅から電車で1駅のうち、小規模校ということまでの推測が可能であることがわかる。所属組織が判明すると、プロフィールサイトから学校名をキーに検索することで個人情報入手の糸口が見つかることになる。

ツイッター単独でも、同様にして、居住場所を絞り込むことができる



図8 居住場所到達の例

図8は、連休中における1日の行動を抜粋したものである。12:37にパソコンのWebから投稿して、豊洲の映画館で12:50に携帯から投稿したものであることがわかる。よって居住場所から豊洲の映画館まで徒歩圏内にあるこ

とが判明してしまう。さらに、プロフィールサイト経由で検索した他の友人のリアルタイムやブログの内容を把握してより精度の高い居住場所を追跡することも不可能ではなくなってくると思われる。

このように、通常のツイート内容として一見リスクがあるとは思えないにもかかわらず、発信元や書き込み日時から追跡されるかもしれないリスクを認識しておく必要がある。

6. おわりに

ツイッターや生放送が普及しているが、教材や体制などの面において十分な教育環境が整備されているとはいえず、教育現場では日々変化する情報環境の利用形態に迫いつていると言いき難い。情報モラル教育も、現状では危ないものには近づく、といった事前対処に終始しているのではないであろうか。

あるべきツイッターの利用方法や生放送のありかたについては、それをどのように「教えるか」という点を含めて、多方面からの検討が必要であると思われる。実際、技術の驚異的な進歩に対して、必ずしも新たな手段に使い慣れない「大人」が、柔軟に新たな手段を使いこなす「子ども」に教えられることは、その「使い方」というよりも、それに伴う「危険性」であると思われる。要するに、「危険性」を熟知したうえで「利便性」を享受する、という全ての技術や手段に共通する「社会のルール」を教えることが、最も重要なことであろう。

参考文献

- [1] 佐野元彦、岡野大良「プロフの現状・青少年の危機意識について」、第23回JSSM全国大会予稿集、pp.153-156
- [2] ツイッター、「twitterの楽しみ方」、<http://support.twitter.com/groups/31-twitter-basics/topics/104-welcome-to-twitter-support/articles/247765-twitter>
- [3] 東京都教育委員会、「学校非公式サイト等の監視結果について」、http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/pickup/seisaku/kanshi_1004-1103.pdf > 2012年5月1日アクセス
- [4] マカフィー、「高校生のCGM(消費者生成メディア)利用実態」調査結果、http://www.mcafee.com/japan/about/press/pr_10b.asp?pr=10/09/22-1、2012年5月1日アクセス
- [5] 未来検索ブラジル、「ニコニコ大百科」、<http://dic.nicovideo.jp/>、2012年5月1日アクセス